

7月の植物

カラスビシャク (サトイモ科)

学名 : *Pinellia ternata* (Thunb.) Breit.

へそくりという方言の薬草がある。これが畑や畔に生える雑草のカラスビシャクとのこと。掘り取った球茎（塊茎）をためておくと、生薬問屋の仲買人が買いに来るのでへそくりにすることができたという訳だ。

カラスビシャクの球茎は径約1 cm、この先端から長い柄のある葉を出す。葉は3小葉、小葉は通常長楕円形。葉柄にむかごを付ける。このむかごによる繁殖力ははなはだ強い。5-8月、花茎が葉よりも早く出て黄緑色の仏炎苞をもつ花を開く。仏炎苞とは仏像の背後にある炎を形どったもの。

球茎は半夏と称し漢方における重要な生薬。但し、噛むと喉を刺激するような独自のえぐみがあり、そのままでは副作用があり服用できないので灰汁でよく洗って薬用にする。半夏にはのぼせ、頭痛、めまいなど水分や気分の逆上を抑えて吐き気を止める作用があり、つわりや胃と気のかえを改善する漢方処方に配合される。

また、県内山地の樹林下にはやや大型のオオハンゲが見られる。個体数はむしろカラスビシャクより多い。カラスビシャクとは葉身が3深裂（葉柄無）することで容易に区別がつく。球茎は約4 cmと大きく、噛むと同じくえぐみがあるので、今後、新しい薬用資源として期待される。

(文責 野中源一郎)



カラスビシャク (佐賀市 2012.7)



半夏
(皮取り)



オオハンゲ (多良岳林道 2021.7.12)